

堀田会長に聞く

「堀田力会長に聞く 2」

「新地域支援事業」と「世界高齢化会議」のふたつのこと

尾崎美千生・堀内正範・岡本憲之

日時 7月22日（火） 3時～4時30分

「世界会議」の発起人に「ノー」とはいえない

尾崎：きょう堀田先生をお訪ねした目的はふたつありまして、ひとつはいま進めておられる「新地域支援事業」のお話と、もうひとつは今から8年後の2022年に「世界高齢化会議」を日本に招致して開きたいということで準備をはじめたところですが、その賛同者に堀田先生に加わっていただけるとありがたいと思います。

堀田：ほう。

尾崎：賛同者の代表には明石さんということで、先日（5月26日）、お話しにいったのですが、「それまで生きていないよ」とおっしゃりながら関心はおありのようで、最終的には納得していただけるのではないかと、いう気がしているのですが。それにぜひ堀田先生に加わっていただけるとありがたいのですけれど・・・。

堀田：そうですね。まあ、「世界会議」のほうの発起人ですか、その時には死んでいても今はやるということはできるでしょうから、声をかけられてノーはいえませんが。

尾崎：ぜひお願いいたします。

堀田：2022年というのは世界3回目ですよ。

尾崎：そうです。

堀田：もうちょっと日本の高齢者が社会貢献活動をしていないと、恥ずかしくてやれないですよ。

尾崎：そのために3段階を考えていまして、まず日本国内でやろう。首都圏を中心にやって、それからアジア会議に拡大して、最終的に世界会議にもっていこうということなのですが。

堀田：場所が動くのではなくて、場所は日本でやるということで、集めるレベルをそういう段階にして。

岡本：国内、アジア、世界と3ステップで世界にもっていきたい。最初のふたつは国連の会議とは限らないで。最後は政府間会議ですから国連と日本国政府が腰をあげないかぎり実現はできないのですけれど。

堀田：それはいいと思います。国内でやるのなら恥ずかしくないですよ、お互いにぶらぶらしているもの同士ですから、もうちょっとしっかりやりましょうということで。しか

しアジアを対象でやることになる、アジアの高齢者はよく働いていますからね。社会貢献もしていますから、いまの日本では恥ずかしい思いをする。「恥ずかしいから世界にむかってはやれないよ、アジアをやったところでやめよう」ということになるかもしれない。

堀内：そうってはいけませんですね。

堀田：それを目指すなら、「もう一息、みんなで頑張って社会貢献しましょうよ」ということにならないと。

堀内：呼びかけるに当たってそれが前提ですね。

堀田：日本のお年寄りが動き出したら、そこそこ世界でやれる。そこまで持っていけるかどうか。

尾崎：それが世界会議をやる意味なのですが。

前回「マドリード会議」で急遽開いた分科会

岡本：前回の2002年マドリード会議の時の日本政府からの出しものといえるのは、2001年に改正されていた「高齢社会対策大綱」、それが唯一のという程度で。

尾崎：先生はNGOの関係でいかれたのでしたね。

堀田：そうです。われわれはNGOとして行きましたけれど、政府参加としては恥ずかしいものでしたね。政府の方の会議はそれとしてあって、恥ずかしいことに日本は大臣も出ていない。われわれは政府とは関わらないで知らん顔をしていましたよ。NGOはしっかりやろうということで。行ってみたら4000人あまり来ていました。一日に何十という小さな分科会が午前と午後と3日開かれて、何百という分科会が各国からきたNGOが主催して開かれた。行ってどれに出ようかと思ったらアジアのものがひとつもない。

尾崎：そんなでしたか。

堀田：アジアは何をしているんだ、これは恥ずかしいというので、行った晩に樋口恵子さんと相談して、われわれでやろうということで。急遽、分科会を申しこんで、場所をとって時間をとって、日本主催の分科会をやりました。「Let's share the experience of aging in Asia. アジアのエイジングの経験をシェアしよう！」という分科会の名称にして申しこんで。わたしと樋口さんがプレゼンターになって。もちろんわれわれは介護保険制度を誇りに思っているわけだから、どうやってどうできてと、ほぼ2年間の経緯を英文で書いて、樋口さんとそれぞれプレゼンをやった。参加者がどのくらい来るかと思ったら、100人くらい来てくれました。

尾崎：そうでしたか。

堀田：アジアの主要国はほとんど来てくれた。中国（メインランド・チャイナ）は来だし、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア・・・。アジアの国々のエイジングに関係する役人もいたし、NPOもいたし、学者もいた。それが100人のうち6分で60人くらい。あとの40人がアメリカインディアンとか、アルメニアの女性とか、アフリカとか、中南米とか。要するに世界の少数派ですよ。世界の少数派が、アジアの日本がや

るということで関心を持った。貧乏国の代表と思ったんじゃないですか。親近感を覚えたんでしょうね、来てくれました。

堀内：アジア・アフリカの代表として。

アジアは「介護保険制度」に関心を示さない

堀田：それでわれわれはプライドを持ちながら、介護保険制度をつくった苦勞話をしたわけです。ところがだれも興味を示さない。

堀内：興味を示さない。わからない？

堀田：介護保険制度に関心を示さない。行政がやるそんなものはダメだということで。われわれが主体になってエイジングの幸せをつくりだす、そういう発言ばかり。次々に手をあげて、それぞれわが国のエイジングは、という話をする。中国までが政府ではなくわれわれがやるという。フィリピンもマレーシアもぜんぶそうですね。中国の女性がいったのですが、政府に望むことがあるとすれば、それは年寄りでも働けるような技術を教えることだといっていました。介護保険制度をつくって面倒をみるということについては質問がでない。アメリカインディアンからは、アメリカ政府はもっとやれという意見は出ました。国連といっしょです。金持ちはカネを出せ。アジアからはまったく出なかった。われわれは働いて自分たちでやるので介護保険制度などまったく考えていないという。樋口さんも同感だったけれど、恥ずかしくて。高齢者を働かせないでとくとくと介護保険制度の話をしたら、なんだ、あなたたちは依存症ではないか。

堀内：高齢者が働くことについての日本政府の認識が誤っている。

堀田：アジアでやったらいいですよ。このままでは日本中が恥ずかしくなって、世界でやろうなんて大それたことは思わなくなります。もっと自分たちでやれ。

尾崎：そのようすは新聞の記事はどうだったんでしょう。

堀田：読売新聞は服部君と朝日新聞は編集委員だった川名さん。読売の服部君が一面をつかって書いてくれた。溝田さんという方が分科会のようすを書いていますね。

堀内：樋口さんが毎日新聞に書いていました。

堀田：樋口さんは恥ずかしかったとは書いていないけれど、ぼくは恥ずかしかったですね。

堀内：おふたりとも英語でやられた。

堀田：樋口さんはわたしは英語は苦手よといって通訳がアシストしていました。

尾崎：日本に対する期待というのはなかったんですか。

堀田：アジアからはまったくといっていいほどありません。むしろイギリスとかアメリカとかヨーロッパの学者が日本の介護保険制度はドイツやオランダより進んでいるとあって、何人かが聞きに来ていましたね。

堀内：先進国のそれも学者にはわかる。

堀田：そこではとくとくと、ドイツやオランダよりきめ細かくやっていると。

国際会議より国内事情を優先する日本政府

岡本：政府間の会合とNGOの会合とでは雰囲気は全然違うという感じだったようですか。

堀田：政府間の会合には顔も出していないけれど、おもしろいはずがないじゃないですか。

30年前の1986年の「大綱」(長寿社会対策大綱)などは特に恥ずかしい。日本には「隠れ資産」があるから高齢化には心配いらぬという政府側の発言があります。高齢化に対応するための「隠れ資産」って何だと思います？ 「家族介護」です。日本は家族がやるから大丈夫だといった。

尾崎：1982年の「ウイーン会議」の時には政府から閣僚が行っているのでしょうか。

堀田：その時はNPOは行っていないから。NPO会議自体がまだなかったころ。

岡本：日本には82年ころにはそういう意識はなかった。

堀田：ないですね。

岡本：1999年の「国際高齢者年」あたりからそういう意識が。

尾崎：2002年にも閣僚は行っていないのですか。

堀田：国内事情の都合で行かなくなった。

岡本：日本は国際会議をおろそかにして国内事情を重視しますね。リオの「地球サミット」(環境と開発に関する国連会議、1992年)の時にも宮澤首相はいかなかった。

堀田：行ったって決められたことしか発言しない。

尾崎：日本でアジアの会議を開くとすれば、NGO中心のほうがいいのでしょうか。

堀田：国連がやるなら形式的には政府間協議でしょう。国連会議をやればNGOも合わせてやろうというしきたりができている。ほっといたって勝手にやりますよね。

尾崎：1994年の「世界人口開発会議」のときに、河野外務大臣に呼ばれて話をしたのですけれど、そのときNGOをどうするかで他の国は政府代表団にNGOが入っていますよといったら、それでは入れようということになって。

堀田：政府会議そのものにはNGOは出たがらない。そんなものに出たがるのはニセモノですよ。政府とはまったく別に活動する。

岡本：NGOはNGOとして同じ時期に同じ場所で。

堀田：NGOでやって世界で共有してそれを市民にアピールしよう。

岡本：「地球サミット」のころの日本のNGOは弱かったですね。

堀田：アジア全体のNGO意識が弱いんですね。2002年にも何十人か来ていることは来ていた。それぞれ発言したが、しっかりしていますよ。国の政策なんかとくとくと説明するような非NGO的のなんかいない。会議を設けてプレゼンテーションしたのはわれわれなのに、いま思うと冷や汗が出る。

岡本：それがなかったら何もやらなかったことになる。

堀田：アジアの人たちとやろうというそこは良かったんですね。恥ずかしいのは日本の中身です。

堀内：冷や汗でしたか。今度は冷や汗をかかないように。

堀田：自分で飛び込んでやって冷や汗をかくんだから。

岡本：今度、堀田先生がやっておられる地域包括支援というような枠組みの活動は、アジア発で誇れるのではないですか。

堀田：どうでしょう。きちんとやれたらですね。やって当たり前のことですから。政府がやりすぎて施設をつくって、みんなそこに入るようになったから、こんなことをやらなければならない。アジアなんて施設はたいしてないし、病院だってないから、自宅で死ぬのがふつう。あれが地域包括ケアです。

堀内：アジアには本来ある姿ですね。

堀田：日本はやりすぎただけで、でっかいツラできない。アジアでは年寄りも死ぬまで働いているし、ぶらぶらしていない。これをいま日本でやりましょうとやっている、これは実は遅れているのですよ。

岡本：それなのに高齢化最先進国とかいっている。

堀田：年寄が多いのは最先進国ですけども、やっている中身は遅れている。

堀内：高齢者先行国だけでも高齢社会先行国ではない。

堀田：だから年にとってよくやるよねえと自分で思いながら、半分は恥ずかしい思いがしている。だから発起人はやりますよ。それやるのなら、国内でもっとしっかりやらないと。人集めて恥をかくことになる。

「新地域支援構想」を公表

堀内：昨年10月に尾崎さんとお訪ねしてここで話をしたときに、医療・介護の法律の見直しにあたって、高齢者を社会参加させるために会をつくってやりますよとおっしゃってました。われわれは健康な高齢者の社会参加の姿が、どこまで法律の先に見えてくるのかと注目していたのですが、「新地域支援構想会議」による提案にも関わらず、結局は原老健局長がいていた方向、「医療・介護一体化」という方向に動いたですね。消費税増税の直前ということもあって、厚労省内の分科会で細かく検討していて、そういう方向へ法改正が進んでいった。これは「支えられる高齢者」にとっては財政難の中では最良の見直し方であることは確かなのでしょうが、それと同時に堀田先生がおっしゃる1000万人の元気な高齢者「支える側の高齢者」が法律を通してどう見えてくるかに期待していたのですが、14団体の地域支援構想会議の力ではそこまでは・・・

堀田：いかないですね。

堀内：そのかわり6月18日の「医療・介護推進法」の成立のすぐあと、6月20日に厚労省に提言を出して、記者会見をして「新地域支援構想」を発表しておられる。自治体とともに一般の高齢者が参加するよう呼びかけて、堀田先生は厚労省の職員といっしょに全国をまわっておられる。 6・20 記者会見



堀田：高齢者が入っていっしょに支えましょうということ。

堀内：そのために高連協の代表である堀田先生が苦勞をなさっている。わたしは5月12日の「高連協」の総会にはオピニオン会員として参加しましたが、これが「高齢社会」形成への最重要の課題として取り上げられて、堀田代表がやっている活動を組織をあげて支援し推進しようという決議が出るだろうと期待をもっていました。会場からは出ませんでした。最後のまとめで、堀田さんがやるべきことをやらないで広報委員会を充実して何を広報するのですか、とはっきり言われたわけですが。

堀田：あのときは激しく言ったのですがね。

堀内：「さわやか福祉財団」をはじめ、全社協や日生協など14団体が新地域支援構想会議に出ていますけれど、あそこに「高連協」が参加して声も出さず、支援活動をするありようでない、本来の高齢社会活動をリードする「高連協」ではないですね。

堀田：そうですね。

岡本：「さわやか福祉財団」の力は大きいですね。影響力は「高連協」よりはるかに大きい。

堀内：各地のインストラクターのみなさんが地元でよく動いておられる。

堀田：よくやってくれています。

堀内：いま堀田先生の活動なくしては自治体も動かないし、厚労省も説明に出てこない。

岡本：この間、福岡にいったら福岡でも先生が進めておられる「生活支援コーディネーター」の話が出ていました。さわやか福祉財団の方ががんばってやっておられます、と市の担当者がいました。全国でそういう活動が分かってきて、「生活支援コーディネーター」をいかに育てるか。

堀田：まさにいま必要です。

岡本：各地に知られればと思いますが。

堀田：それをなんとかしようとして全国をまわっているのです。

「地域支援コーディネーター」の役割

堀内：地域にはそういう役割にふさわしい人がいます。その人たちが理解して動き出してくれれば周辺の高齢者が動き出す。

堀田：そうですね。やっぱり人です。どこにも人材はおります。その地域でそういう動きをつくっていこうという人たちが集まって、やる気の自治会長やNPOでも協力してやる人、役人OBにもいる。そういう人たちが勉強会を開いて、地域をどういうふうにつくっていくか。すでに出てきています。あんまりNPOとか自治会にどっぷりはまっていた人と、樋口さんがいう地縁組織の「草の根封建おやじ」とはうまくいかない。ここはむずかしい。とくに50代60代のばりばりばあさんと地縁組織とは合わない。この両方を動かせる人でないとうまくいかない。コーディネーターにはなれない。そういう人はいるんです。

岡本：そういう人がコーディネーターになって中心になって・・・

堀田：支えると地域はうまく動き出す。

岡本：地域によって違いますね。社会福祉協議会の人であったり自治会の人であったり。

堀田：そこにいる人材次第です。どこまで広い視野をもって動いているかですね。この間、海老名の先の秦野という市にいったのですが、会議を主催してくれたのは地域の自治会でした。防災訓練が元になってつくった組織で、これは男たちが出てくるのです。どこに不自由な人がいるかがわかっているから、助け合いがやれる。それと東海大学があるので、大学生が参加して見守りなど町の手伝いをやる。大学の先生もきていましたけれど。

堀内：秦野でできるということになれば、大都市圏の近郊の町なら同様に。

堀田：大都市のドーナツのところで。

堀内：元からの土地持ちもいるけれど、外から来た優れた人たちも多い。

堀田：そうです。

堀内：そういう点では範囲は広いですね。

堀田：広がってきますね。立川市のほうではおばさんですけど、自治会加入率100%にした。女性は出てくるけれど、男を引き出さねば。男はおカネだということで、清掃とか剪定とか見守りとかの事業をプロより安いおカネで請け負って、男を引っ張り出してしごとをさせる。朝、剪定をして終わったらちょっとした小づかいをもらえる。これで孫のみやげが買えたりビールが呑めたりする。男が出るようになって、集会所に集まるようになって、あそこにこういう人がいるから助けようということになって。子どもが出てしまっただけで一人暮らしが増えていきますから、この人たちは認知症になったり亡くなってほったらかしにされるのがこわい。そこをきちっとやりますということで市民後見人をたのむ。死んだあとの葬式は自治会と契約しておいて、亡くなったら自治会で面倒をみるというしくみができた。団地に新しく入ってくる人は歓迎会をやって、あなた一人になっても死んでも面倒みますよということで自治会が全員加入になった。これはおばさん一人の力です。

岡本：それはすごい人ですね。

堀田：人です。どうやって人を引っ張り出すか。秦野の例は男ですから食事とかは興味がない。防災ですね、これに男を引っ張り出して、これで助け合いにつなげる。副会長は女にして。

岡本：堀田先生のお話から、男性を引っ張り出すキーワードがいくつか出てきたですね。

防災、小づかい、葬式、市民後見・・・

堀内：それぞれ地域の特徴があるとしても、それをよく見抜いた人がいて・・・

堀田：そこにあったことをやります。

堀内：外から来た人の、上から意識ではなくて。上からいくと地域の人はダメですね。

堀田：いっしょにやりましょうよ、でしょうね。でも男の会長はえばっていますね。だいたい上からものをいっていますね。それはそれで、おばさんがフォローしていますから。古い形の地元の人が会長のところは、自分から動きませんし、ダメですね。そういうところは有志があつまって地域協議会を別につくってやっています。いま自治会自身がやって

いるところと名前はいろいろありますけれど有志による協議会方式のところと。ここ10年ほどこちらがずっと増えて半分くらい。

岡本：そういう形だと動きますね。

堀田：動きます。結局、もとの自治会にとって替わるのですね。そのほうがいいところが多い。

堀内：先生のお話のポイントからすると、地域でいうと、大都市のど真ん中でもなく過疎になるようなところでもなくて、その中間の地域で成功することが多い。

堀田：超過疎は人がいないのだから、これはもう滅亡地域ですね。災害を受けた地域もきびしい。持続可能な地域のためにといっても乗ってこないところもある。自分たちの代で終わると考えている。それならそれで残ったもの同士のそういう助け合いもあるし、そういうしかけをつくっています。消滅する市や町が2040年に400余りあるという増田リスト、あれはあの通りです。もっと無くなります。増田さんは助成金を出してとかいっていますが、引き戻す手はないし、それはムリですよ。女性も東京へ出てきたからといって子どもを産むかというところでもない。

岡本：東京の出生率は低いです。

堀田：結婚しませんからね。東京だけが栄えるというのはウソですよ。そんなに子どもを産んでくれませんし。だから地方はダメ、東京もそんなには明るくはない。

尾崎：そうですか。

堀田：無くなるならそれはそれでなんとかしなければならない。これは移住しかない。近くの人口5000人くらいの町に、住民がばらばらの集落から移り住んでもらって。それで共同住宅のようなところに入ってもらって、小さな車で墓参りができるようにする。元のところに住まないのだから先祖に申し訳ない。きちんと先祖の供養をすればいいので、ムリしてそこに住んでいる必要はない。移り住んでもらって新しいコミュニティをつくって、そこでは車なしでも暮らせるようにする。周辺地域から集めて最後までそこで暮らしてもらおう。ここを地域包括にする。これしかない。

岡本：先祖の墓にこだわる。

堀田：バスを出していっしょにまわればいい。被災地の場合も、新しい所にある程度まとまりますから医者も看護師も置くことができる。前のコミュニティをベースにしながらいくつを集めると、200メートル離してくれとか要求がでる。こっちの部落の人と別の部落からの人とを別にしてくれという。くっつけなくて200メートル離してくれ。そうして地域包括が可能になる。あれしかないですね。

「地域支援包括センター」を中心にして

岡本：地域包括というと平均して中学校区で1万人くらいですか。

堀田：5000人でもいけますよ。

堀内：生活圏ですよ。

堀田：はい。5000人で十分にいけます。医者も20軒持てばなんとかやっていけるのです。片道30分以内に20軒。そこは何かあったら医者がかみならず行く。看護師さんも行く。過疎のところはそうして集まってもらおうと地域包括もやりやすい。コンビニをいれて、役所の申請から年金の振り込みから、全部やれるようにして。そして二階に認知症のグループホーム入れる。そうすると亭主が認知症になったら奥さんは上から下りてきて最後まで面倒がみられる。

堀内：二階が認知症。

堀田：それを言っているのです。国交省も賛成してくれて図面まで書いてくれているのですけれど、まだどこもやらない。

尾崎：増田さんがいっている中核都市とはどういう違いが。

岡本：あれはコンパクトシティの話です。富山市とか。いま堀田先生が言われているのは超過疎の地域をどうするか。

尾崎：移住によってまとめようという話。

堀田：過疎地対策ですね。あまり分散していると地域包括の助け合いに乗りづらい。

堀内：一方の東京のど真ん中はどうしたらいいですか。

堀田：東京のど真ん中は、手に負えませんね。新しいコミュニティはむずかしい。冷え切ってあいさつもしないですから。山手線の内側では助け合いはむりですね。東京のど真ん中に住む人は自分のおカネで最後までやってくれ、頼めば医者もきてくれる。全部あなたのおカネでやればいい。はっきりいってそれしかないですね。温かい心のかよった暮らしをしたければ山手線の外へ出て、そのコミュニティと混じって暮らしたらどうですか。自分の部屋へ入るのにカードを何回も差して、守衛がいて、あんなところでは助け合いは成り立たない。

岡本：コミュニティがない。

堀内：ウサギ小屋よりハチの巣のような住まい。

堀田：うちの財団の人が、港区に事務所があるのに、堀田さんは郊外から外ばかりしかけて地元の港区で何もできていないではないですか、財団として恥ずかしい。はじめのころにやったことはあるのです。グループホームをつくったり、居場所をつくったりした。居場所にしたら、地方へいったら5万円払えばできるのに、1500万円もかかる。人件費をかけて、そんなもの何になるんですか。港区でのしかけはやめました。一人ひとりで勝手にやってください。事務所があるのですから、これはあんまり言えない。

堀内：するとやっぱり仕掛けて有効なのはドーナツの地域ですね。都市機能はしかたなくあるわけですが、そこで生き死にするという問題は別であるということに。他とは条件が違いすぎますね。被災地のことですが、そうせざるをえない面もあって、まず地域支援包括センターを真ん中に据えて、周りで元の地域での関係を活かしながら生活をする、活動をする、事業をする。いろんな人が交流しながらセンターを囲んでいるというのは、実験的な面もふくめて納得がいきますね。

堀田：サービスセンターを中心にしてですね。

大震災被災地での経験から

岡本：すこし筋違いで申し訳ないのですが、被災地の地域包括の仕掛けがうまく機能するためうかがいたいのですが。まず仮設住宅にはいった。そこですこしでもコミュニティらしく暮らして、その後に仮設住宅から本格的な住宅に移って、新しいコミュニティでうまく暮らすには、どんなやりかたがいいのかアドバイスをいただけると・・・

堀田：中越地震がいちばんうまくいったんですね。阪神淡路のときは経験がなかったからばらばらに入れたんです。もと住んでいたところとは関係なしに仮設住宅に入れた。完全にコミュニティがこわれてしまって、なかなかつくれなくて。このときは浅野さんが宮城の知事で、かれが仮設のコミュニティをつくるためにということで、仮設住宅2棟を寄付してくれた。これで食事をいっしょにして毎日顔をあわせる。お互いに分担してしごとを持つ。浅野さんは集まれる場所を寄付した。これが阪神淡路のときのコミュニティのスタートです。それが空き室を集まる場所にしたり、われわれはふれあいテントを持っていていきましたが、そういう空場所で集まりながら仮設の絆がなんとか阪神淡路のときもできでした。そのコミュニティを活かしながら仮設から住宅に移るときにまとまって入った。これが阪神淡路のときですね。中越のときには、集落ごとに仮設に入った。初めからコミュニティは仮設でできていて、そのまま帰りましたから、いちばんスムーズにいった。東日本ではその経験があるから、集落ごとに仮設に入れましょうと政府もわれわれも言ったのですが、半分もそうできなかった。ばらばらに入れている。仮設がなかなかつくれなかった。もと海で平地になったところに住んでいてそれが全部流された。あとは山なので、削るようにして土地を開いているから仮設がまとめてつくれない。分かっていたんだけど、おじいちゃん、おばあちゃん、病気の人から仮設に入れようというので、結局、そっちのほうが多くて。でもまとまって入ったところとは歴然とした差があります。でもなんとかできつつある。これに移すときにまとまってはいれるものが建てられない。ここでまたばらばらになる。阪神淡路・中越の知恵がほとんど活かされていない。ただ東北の人たちは辛抱づよいし、つながるほうもなんとか絆ができています。最高の知恵が厚労省の次官だった辻さんが発案した向い合わせのケア付き住宅ですね。

岡本：大方潤一郎先生の。玄関が向あわせになっている。ドアをあけると顔を合わせる。

堀田：辻さんのチームが出した最高の知恵ですね。わたしもこれには負けたと思いました。阪神淡路のときはともかく中越のときになんで思いつかなかったのだろうと思った。こういうつくりをするだけでコミュニティはすごいです。知恵というのはすごいいし、なかなか思いつかない。

岡本：みんなおなじ方向をむいてしまうから出入り口は向こうにあるから顔を合わせない。

堀田：素晴らしい知恵で、参ったと思いました。4月には出してくれていましたので、5月に入って、これだこれだ、というので勧めてまわったけれども採用しているのは、釜石

と遠野だけですね。それも一部です。だから知恵は素晴らしいのだけれど、採用しないで古いやりかたを踏襲してしまう、この進歩性のなさも如実です。いま言うと、早く建てる場所に頼んじゃって後悔していますなんて言っている。

岡本：とにかく早くつくらなければという。

堀田：ですからなかなか絆もむずかしい。いま地域通貨で復興応援をやって絆づくりをしています。釜石、南三陸町、大船渡、・・・大槌。

堀内：それはそれぞれの地域ごとでしたね。

堀田：それぞれの地域それぞれです。大槌町では「ひよっこりひょうたん島」ですからドン・ガバチョ。500ガバチョとか200ガバチョ。

岡本：500ガバチョはいいですね。

堀田：裏に助ける人、助けられる人、どんなことでも書いてそれを持って行って復興商店街で使える。そうすると経済復興にもなるし、寄付してくれた人は表に書いてあるので、戻ってきたのを送っています。そうすると、どこで誰がなんのために使ったかがわかる。これは寄付のしがいがある。南三陸町では月に300枚はでています。

岡本：お願いにきたのに、きょうは逆に啓発されて。

「共助の文化」を推進する

堀田：講演では言っているのですが、助け合いの進め方ですが、そういう助け合いを23年やってきて延びてはいるのですが、全国で要支援を引き受けますとか、障害者を引き受けますとか個別には限りがない、そこで「共助の文化」を推進すると宣言してまして・・・

尾崎：「共助の文化」ですか。

堀田：しごとを終わって、人を助けることができるのに、自分のことばかりしているのが恥ずかしい、とみんなが見るような文化をつくりたい。そういま言っているのですけれど。文化でいまいちばん進んでいるのは学習文化。子どもらは学校へいかないと恥ずかしい。学校が嫌いでもみんな行く。親がうるさいこともあるけれど、社会がそうさせる、そういう文化ができています。これがいちばん誇れるところです。働く文化では、これは日本は結婚したら女性は働かない。逆に北欧では働かないでいると白い目でみられる。昼間いると居心地が悪い。

岡本：日本は男が無職というと恥ずかしい。女性は主婦というといいという雰囲気がある。

堀田：これは男女共同参画なんていってもなかなか壊れない逆の文化をつくっちゃった。アメリカは女性が働く文化ですね。アメリカは男だけで外で飲むことをしない。うちのパーティーでは必ず夫婦と呼ぶ。文化が成立しています。女性も働いています。日本の外交官の奥さんなら専業主婦ですが、アメリカでは働いている。ほかの人の秘書や不釣り合いのしごとをやっていても、働くことが当たり前で、誇りをもって語る。専業主婦だとなぜいまわたしは専業主婦であるかの弁解をします。元最高裁判事が保険の勧誘員をやっている。

健康のためだけではなく、公正な立場でアドバイスをして、ちょっぴり小づかいをもらう。

岡本：有償ボランティア。

堀田：保険会社も公正さを宣伝できるし保険のしくみをやさしく理解させるのは人助け。

堀内：楽しんでやっている。

堀田：ぶらぶらしていないことを誇りを持って話す。

堀内：日本のおじいちゃんおばあちゃんが教育に参加できていない。

堀田：塾があつて子どもに隙間がない。子どもも疲れきっています。

岡本：日能検とか。

堀田：割り込む余地がない。

岡本：「共助の文化」ですね。

堀田：参加しないとさびしいという文化をつくりたい。

岡本：会社を辞めた後、ゴルフ三昧では恥ずかしいという文化。

堀田：厚労省はおカネがなくなってと言われるから言いにくい。ワークライフバランスは失敗したけれど、あれは内閣府と経団連と連合でしかけた。地域で定年退職者が能力をいかして何かやりましょうという運動を、内閣府からしかけて経団連と連合に協力してもらってやれるといい。内閣府は高齢協の本元なのだし、やる気さえあれば動く。

岡本：むしろ高連協はそういう「共助の文化」をみんなで作っていきましょうという運動をするのがいいですね。いろんな団体が参加しているのですから。

尾崎：いまお話されたワークライフバランスは失敗したとっていいんですか。

堀田：経営者がやりたくない。協力するふりをして、ワークライフバランスという名のもとに、サービス残業をやらした。労働者のほうも帰ったことにして、帰らしてもらえない、このブラックの口実に使われた。悪いイメージがついてしまって、最近は言わなくなった。経営者がわるい。

堀田：しっかり日本が「共助の文化」を強めて恥ずかしくないようにして、世界に呼びかける覚悟はいるでしょうね。やるときまでにそういう日本にするという強い覚悟で。

岡本：最後におっしゃっていただいた「共助の文化」をつくろうというのは・・・

堀内：共有しなければいけませんね。ベースです。ブラックのない善意。

岡本：同じように「共助」をやらないと恥ずかしい。毎日がゴルフでは恥ずかしい文化。

尾崎：夏を含めてお忙しいでしょうね。

堀田：この夏はしかたがない。「新地域支援事業」で全国を回ることになりますから。

堀内：やはり堀田さんがいかないとダメですから。それがつらい。

尾崎：ありがとうございます。

(2014・07・28 文責・堀内)